

## K-5 東松島市宮戸月浜地区

2012年1月11～16日（水～月）

---

報告者名	大沼	知	被調査者生年
調査者名	俵木	悟	被調査者属性
補助調査者	大沼	知	

---

### 平成24年のえんずのわりの参加学年とその変遷

平成24年のえんずのわりは小学5年生を最年長とし、小学5年生1人(大将)、4年生1人(副大将)、3年生1人(三番大将)の計3人で行われた。平成23年までは参加学年が小学2年生から中学3年生までであったが、平成24年においては小学1年生から高校3年生までの拡大がなされた。参加学年の拡大の議案は震災以前から挙がっており、理由は平成24年のえんずのわりが小学生だけとなり人数も少ないため、行事を行うことが困難なのではないかという懸念があったためである。そのような中で、3月の震災があり、行事そのものを行なえるかどうか不明という状況になった。しかし夏ころに保存会と小学生とその保護者を交えて話し合いをしたところ、子ども達から「今年もえんずのわりをやりたい」という声があがり、平成24年も行事を行うことが決定した。

そこで、行事を続けるにあたり、参加学年の拡大をおこなうために、10月に保存会、地区役員、保護者などを交えて行った会議にて、参加学年を小学1年生から高校3年生まで拡大することが決定された。

### 平成24年えんずのわり・お籠り

平成24年のえんずのわりも例年通り1月11日から16日まで行われた。この6日間、子ども達は学校が終わると岩屋に集合し、自分たちで食事を作り籠る。

今回えんずのわりを行うのはA氏(小5・大将)、B氏(小4・副大将)、C氏(小3・三番大将)の3人で、学校が終わると夕方くらいに岩屋に集まり夕食作りを始める。岩屋の周りには子ども達の保護者やえんずのわり保存会会長の小野勝見氏、子ども達が通う宮戸小学校の先生や新聞社やテレビ局の取材陣が子ども達の様子を見ており、とりわけ保護者の方はほぼ毎日子岩屋に来て子ども達を見守っていた。

岩屋にはすでに薪、竹が用意されており、子ども達はそれを使って囲炉裏や竈に火を付けて暖を取ったりご飯を炊く。床には発砲スチロールが敷かれ、その上から御座が敷かれてあった。神棚には10本のろうそくと酒瓶に入ったお神酒、稲の入ったとっくり、おちょこ3個、お膳が供えてあった。

夕食作りが始まると野菜の皮むきを主に副大将、三番大将が行い、切り方は大将が行っていた。

野菜は味噌汁の具で、にんじん、たまねぎ、だいこんなどであった。切り終えた野菜をボウルに移し、鍋に水を入れて囲炉裏で熱している間に竈でご飯炊きを大将が行っていた。鍋が温まったところで野菜を入れしばらく熱した後、味噌を入れて味付けを行い、味付けは主に大将がやっていたが、副大将にも味見をさせて味の確認をしていた。しばらくするとご飯が炊きあがり、食べる準備へと取り掛かる。大将が配膳を行う間、他の2名は五十鈴神社へと駆け上がり、拝殿にて「家内安全、海上安全、えんずのわり安全、月浜のみなさん達者で(に?)働くように」と拝み、同様に天王様、観音様、秋葉様順に拝んで、大将が全員分と神棚に供える分の配膳を終えるまで岩屋の中には入らなかった。配膳が終わると2名が岩屋に戻って座し、大将が神棚に一度供えた膳を下して、大将から順に、神棚のお膳から箸を使って自分の膳へと食事を移す動作をし、それが終わると箸をクルリと回す動作をする。同様の所作を副大将、三番大将の順に行い、それが終わると合掌し「いただきます」と言って食事を始める。食事中は3人でご飯の味など色々な会話をしながら楽しげに食事をしていた。

食事を終えると後片付けに入る。その際に、大将に味噌汁を取材陣の人へ配るようにと大将の祖父から指示があり、大将が取材陣へ味噌汁を配った。後片付けは、主に副大将、三番大将が行い、食器と鍋、釜を水で洗う。水は大きいごみバケツに、集落内に自家菜園をしているD氏の水道の水を入れてそれで洗う。そのあいだ大将は囲炉裏に薪や竹をくべて火の調節などをしていった。洗い方や片づけの指示は祖父や大将の父、副大将の祖父などが指示やアドバイスをし、それを聞きながら子ども達は行っていた。

お籠りの間、岩屋に口ウソクの寄進をしに、男性1名とその娘(孫?)がやってくる。その口ウソクを副大将が貰い受け、そのお返しに大将が神棚のお神酒を振る舞った。男性は振る舞われたお神酒を飲み、子どもは飲む真似をし、「がんばってね」と声をかけて帰って行った。この口ウソクは14日の晩の集落まわりの際に、岩屋の内部に飾るもので、月浜の人は14日までに口ウソクを寄進しに岩屋を訪れる。

18:30頃になると囲炉裏の火を消して、岩屋を出る準備を始める。岩屋を出ると子ども達は風呂へ入りにいったん家に帰り、入浴後少し家で過ごしてから20:30ころに仮設の談話室に入って就寝する。談話室には3人分の布団が敷いてあり、子ども達の母親が付き添い、翌日に子どもたちを起こす時間を確認してから談話室を出て子ども達だけで寝る。

翌日は朝3:00過ぎに母親が子ども達を起こしに談話室に行き、起きた子ども達は着替えて岩屋へと向かう。早朝のためか子ども達は眠気眼で、夕食の時と比べて食事の準備が進まず母親に急かされるようにして動いていた。朝食も夕食の時と同様に準備し、副大将と三番大将が神社などで拝んでいる間に大将が配膳し、戻ってくると神棚のお膳を使った動作をしてからご飯を食べる。食べ終わったら鍋、釜、自分の食器を洗って後片付けをして、6:00前には岩屋を出てそれぞれの家に帰る。そこからまた少し寝たり学校に行く準備をしたりして、それぞれ学校へと向かう。

#### 14日の集落(仮設)回り

14日に子ども達がマツノキと呼ばれる神木を持って各家を回ることを月浜では「本番」(ホンバン)と言ったり「えんずのわり」と言ったりするが特に決まった名称があるわけではない。

この日は今回土曜日で学校が無かったため、子ども達は岩屋での朝食をいつもよりも遅めにし、家に戻ってから休んでから 15:00 ころに岩屋に集まって夕食の準備を早めに行った。この時に高校生が 3 人来て、岩屋に入って子ども達にお籠りの様子を聞いたりしてみんなで喋っていた。夕食を取り終わると子ども達と高校生が、寄進された口ウソクを岩屋の淵や神棚、囲炉裏、竈などの淵に全て並べて火を付ける。岩屋の内部を囲うように並べられた口ウソクで岩屋の中は明るくなる。段々と取材陣や地域の人達が岩屋の周りに集まりだし、行事が始まる雰囲気が高まる。高校生達はこの間、仮設を回る際の唱え言の確認をし、大将に何を言うかの指示と確認をしていた。

19:00 になると子ども達は神社に置いてあったマツノキを手にとって神社の前に一列に並び、その後ろには高校生達が一列に並んで行事が始まる。高校生の「せーの」の掛け声から子ども達が「えーい えーい えー (い) えんずのわりとうりょうば かづらわってすをつけてたーどーがーみさたーたみいーれて えーぞがすんまさなんがせ えーい えーい えー (い)」とマツノキを地面に突きながらリズムを取って唱える。これを 3 回繰り返すと、高校生の「せーの」から子ども達が「おかはまんさく うみはたいりょう ぜ (じ) にのかね (め) はらめ」といって締める。同様のことを天皇様、観音様、秋葉様の順に行う。それらが終わると、家屋の残っている家 3 軒をまわり、そこから仮設を一軒一軒まわった。子ども達が来ると家の人達はご祝儀と米ないし餅を用意して玄関に座して待っており、子ども達は玄関前に一列に並び、「えーい えーい えー (い) …」の唱え事をご祝儀の数に合わせて言い (ご祝儀 1 つに対して 3 回唱える。2 つある場合は 6 回となる)、それが終わると「民宿をやる予定はありますか?」、「海苔やっていますか?」などと聞き、それに対し、「やる」という答えがあれば「民宿繁盛するように」、「海苔大漁するように」と唱える。その他にも「商売繁盛するように」や「じいちゃん、ばあちゃん達で長生きするように」などがあり、「震災復興するように」という今までになかった言葉もあった。家をまわる順番は従来は決まっていたのだが、仮設をまわる際は従来の順番ではなく、仮設住宅を西から東へ順にまわるようになっており、プレハブの月浜公民館には震災後月浜を出た家族やこれまでに月浜にゆかりがあった人達など 5 組ほどが待機しており、子ども達が公民館にくると一組ずつ押んでもらっていた。また、月浜仮設には里浜、室浜からの入居者もいて、今回のえんずのわりではその家もまわった。仮設を全てまわり終わると浜へ出て 10 メートルほどの間隔で並び「えーい えーい えー (い)」の唱え言を大声を張り上げてうたい、高校生から止めていいという指示が出るまでうたい続ける。それが終わると行事が終わり、岩屋へ引き上げていって、22 時ころには家へ帰って風呂にはいり、その後談話室で就寝し 14 日を終えた。

### 15 日のご祝儀分配

15 日は 14 日のもらったご祝儀をえんずのわりに参加した子ども達に配る日である。これには保存会会長である D 氏の立ち合いのもと民宿「かみの家」において行われる。子ども達はご祝儀の入ったバッグをもってかみの家に向かい、そこでご祝儀袋から現金を取り出して合計金額を数える。その金額から 3 人にお金を分けるのであるが、学年ごとに 10 円の差額をつける。そして本来は高校生にはお金をあげる必要はなかったが、今年から行事参加学年高校生まで引き上げたこともあり高校生にもお金を分配することとなった。だが高校生は部活などで行事に全日参

加することは不可能なため、今回は配分を日当制とし、行事期間の6日間と薪やマツノキの準備をした2日間の合わせて8日間で計算される。10円の差額が適用されるのは小学生だけで、高校生の日当には差額がなかった。

### 16日のホイホイ

行事の最終日である16日は、神社での鳥追いを行う日である。朝5:00に子ども達は母親に起こしてもらって神社に迎え、正月飾りの切り紙を、ナマコを突くのに使用する竹の竿の先端に付けた竿を大将が持ち、一列に並ぶと「ホイホイホイ…」と言いながら神社の外周を4周まわる。これが終わると行事の一切が終了し、子ども達は家に帰っていった。